

冷涼な気候を活かした栽培

～高冷地でほうれん草の収穫期迎える～

黒石基幹支店山形支店管内の厚目内地区では、ほうれん草の収穫期を迎えています。

ほうれん草は暑さに弱いため夏場の栽培が難しいとされていますが、同地区は高冷地のため、冷涼な気候を活かして新鮮なほうれん草を栽培できます。

7月27日、同地区の木村郷任さんは、収穫作業に追われていました。「夏場のほうれん草栽培は水管理が難しく、適切に行わなければ病害虫の発生を招くので気が抜けません。品質の良いものを栽培するため、管理を徹底します」と話しました。

収穫が途切れないように間隔を調整して播種（はしゅ）し、10月いっぱいまで収穫が続きます。主に県内市場へ1万3000箱（1箱／5kg）を出荷する予定です。



ほうれん草を収穫する木村さん

軟果前に収穫を JA津軽みらい 津軽の桃

～早生桃「あかつき」出荷説明会～

当JAは7月27日、平賀東部りんごセンターで早生桃の出荷説明会を開き、生産者約50人が参加しました。早生桃「あかつき」の収穫適期前に、色や形、熟度、硬さの確認をし、高品質生産への意識統一を図りました。

青果部りんご野菜課の担当者は「糖度計などで糖度を確認し、軟果前に収穫してください」と説明しました。

当JAは、平川市と協力して糖度の高い津軽地区の桃を「津軽の桃」としてブランド化をしています。

早生桃「あかつき」の出荷は8月中旬から始まり、主力となる「川中島白桃」、晩生桃「だて白桃」と9月いっぱいまで出荷が続き、合わせて4万5000箱の出荷を目指します。



桃の出荷規格を確認する生産者

流通量減で高値販売

～令和元年産りんご精算報告会～

当JAは7月13日、管内4か所で令和元年産りんご精算報告会を開き、JA全体の販売額が142億6700万円（前年比98.5%）となったことを報告しました。

元年産の集荷数量は、着果量不足などの影響で減少し、昨年を大きく下回る268万5000箱（前年比82%）となりましたが、他県産の流通量が少なく、青森県産の需要が高まったことから総じて高値の販売となりました。

山内敏組合長は「元年産は糖度も高く、とてもおいしいりんごとなりました。生産者の皆さまには、健康に留意しながら出来秋に向けて日々のりんご栽培に努めてください」と話しました。



挨拶をする山内組合長



挨拶をする成田清行専務